2012 年 4 月 14 日

「生活保護受給者等の就労支援」

特定非営利活動法人ワーカーズコープ　静岡就労支援事業所　所長　永戸亮

1.　就労支援の取り組みから見えてきたこと

よろしくお願いします。ワーカーズコープの永戸と申します。先ほど布川先生からもありましたが、2011 年の 8 月から、静岡県全県での生活保護受給者それから住宅手当を受給している方の就労支援ということで、県の委託を受けて開始しています。

仕組みづくり

当初は仕組みづくりというところを、まず県庁の地域福祉課の方と内容を確認しながら進めました。埼玉県の生活保護受給者の就労支援を、私たちワーカーズコープが受託してたということもありまして、そこでの実績も評価を頂いて、静岡でも取り組んでいこうという流れになりました。埼玉でのノウハウも活かしながら、埼玉とは違った静岡の地域性に合わせた形で進めていくということで、取り組んできました。

進めて行くにあたって、専門家と呼べるような資格のある人間も数人はいるにしても、13 名の支援員がいる中で、もともと今回求人をかけて集まった地元の人たちが主で、就労支援に関しては未経験で、失業状態の方もいて、専門性といった点では非常に脆弱でした。そのような仲間たちでどういうことを大事にやってきたかというところもお話させていただければと思います。

当初は、私たち自身の専門性の無さから、研修や様々な講義も受けながら、支援対象者に寄り添った伴走支援というところを重視して進めてきましたが、対象者との関係性と同様に、福祉事務所やハローワークとの連携というところが非常に大きかったと思います。

特に福祉事務所では、今回、県の委託事業ということで、内容の説明はされていたかと思うのですが、なかなかどういう事業なのか、ワーカーズコープとは何者なのかというところで、様子を伺われているなぁという感じを受けながらの当初のスタートでした。

ハローワークさんの方も、今もすごく協力的でいてくれる所と、なかなかこの事業のことが、こちらからの発信も弱く伝わっていないというところもありながら、そこの連携が高まっている所の方が、実際就労に繋がりやすいというのは実感としてあります。

そして福祉事務所の方から県の担当課の方へ、直接のやりとりの中で対象者の表情や姿勢が変わったとか、そういったことが伝えていただけると、我々のやっていることの価値が伝わっていくように感じます。我々のような直接支援をし、委託を受けている側の方からよい事例を発信するよりも、福祉事務所の方から伝えていただける事例が出てくると、結果の善し悪しはあっても、非常に県の方も応援してくれるという、そういう流れが今できつつあるという風には思っています。

ハローワークとの連携でも「福祉から就労へ」という流れで、私たちが対象者を支援す

る場合には、その事業に乗せて支援しておりますので、そこで、先ほど小川さんの方から公務員と市民の会食禁止の話がありましたが、会食ということも自治体によっては行っています。ハローワークの方と昼食を一緒に摂って、いろいろ情報交換しながら進めるという協力的なところもあって、このような各機関との連携というのが、まずこの間の特徴的な取り組みです。

基本姿勢

ワーカーズコープの基本姿勢として、資料を添付しておりますが、これは好き勝手なことを自分でつくって、書いたものです。一つの専門家の集まりじゃないという強みを逆にわれわれは活かさなければならないということで、いろんな地域のネットワークだったり、支援員同士の力も出し合いながら、一人で全部抱えないというところが、われわれの大事にしたい部分です。福祉事務所やハローワークが抱えているケースワーカーやナビゲーター1 名当り 80 名というような人数からすると、年間で 13 名の支援員に対して 1000 名という枠で、自立したり一定の支援期間が経てば、支援を終了しまた新たな対象者の支援を開始するという形での 1000 名ですので、一人ひとり丁寧に伴走することが可能な面もあります。そこでは誰一人取り残さないという覚悟が問われるかという風に思います。

支援する中で、支援員の方もメンタル的にきつくなる部分も、さまざまな対象者がいますので、出てきている面も無いとは言えません。特に昨年度は、8 月から事業が始まったということで、8 月から始まって年度末までに 1000 名の対象者ということで、一時の対象者が 100 件を越えるような支援員もいました。

今年度新たに 2 年目を受託することが出来て、そこでは年間常に各支援員が 40 名程度ということで、就労が決まったらまた再度一人受け入れるという、そういう体制で進めて行っています。資料に支援の流れが載っていますが、まずは福祉事務所で同意書をもらって、「この支援を受けます」ということを生活保護受給してる方や住宅手当を受給してる方から、それを書面で頂いてから、われわれ支援員と福祉事務所のケースワーカーさんと三者で面談をして支援が始まるという形です。そこから支援計画を立てて、本人の意向を最大限に受止めながら、単純にすぐに求職活動に向かえる方は、仕事探しの応援というこの図の一番上の方から。訓練に繋いだり、ボランティアの体験だったり、職場の体験というところから始める方もいるというとこで、それぞれの今の状態に合わせて、相談もしながら伴走支援をしていくという流れで支援しています。

対象者の現状

伴走支援をしていくということで、実際どうしても 1 対 1 の、個の支援になっていく訳ですが、その支援員のたった一人の存在というのがとても大きいというのが、この間感じていることです。ほとんど福祉事務所のケースワーカーさんやハローワークで相談をするということ以外、人との接点を持てていないという方がたくさんいます。面接を受けても採用されず、挫折の連続で、生活保護を受けているというだけで社会的な偏見もかなり大きいというのは、私たちもこの間いろいろネットワークを繋いでいく中で感じています。

生活保護を受けている人、生活保護受給者というだけで、税金を払っていない非国民だというような言い方をされる方もいました。報道の影響もあって、怠け者がほとんどだという印象を持っていたりとか、それから不正受給のことがクローズアップされていることもあって、生活保護受給者の印象がとても悪いということを地域の方たちの言葉からも感じます。本当に私たち、先ほども言いましたように、専門家という括りですごく弱い面もありますので、地域のネットワークを作っていく、地域の中で社会的包摂を作っていくというところが必要になるという風に思っています。そこの難しさも実際、今、レジュメの 2 番目の課題というところに繋がってくるのですが、その難しさは強く感じているところです。

ただ一人の支援員が、すごく近いところで接点を持つようになったというところで、大きな変化が見られて、気軽にわれわれの事務所に来所しに来て、ずっと長話をしていったりとか、人への信頼だったり、自信が回復されていくという所が、この間すごく見られています。本当に細かな履歴書の書き方や面接の受け方ということは、ごく一般的にやられていることではありますけれども、ずっと引きこもっていた方などは、どこに、どういう交通手段で面接先を受けに行けばいいかというところまで確認をする必要があります。その確認も、行くまでのシミュレーションをしたり、実際行ってみたりしているのが現状です。

あとは面接を受ける直前、私なども面接を受けるとなるとびびってしまいますけども、本当に面接というだけでおどおどしてしまう方がたくさんいて、面接の直前に一旦面接会場近くで会って、面接の練習をすることで就労につながったというような、力が無いなりにきめ細やかに密接にできるという部分に強みがあると思っています。

実績・数字の価値と数値で表せない伴走支援、意欲喚起の価値

実際、就労が決定している数も、就労が決まって辞めてしまうこともあるので、瞬間的な数値になるのですが、3 月末のところで、全体で支援を開始した方というのが 848 人いて、その中で 195 名の就労が今時点決まっていて、全体の約 23%弱になります。あと訓練に繋がっている方が今時点で 6 名いまして、あわせて 23%を越えるというところではあるのですが、23%という数字がいいのか悪いのかというのも、評価はいろいろ別れるとは思います。いろいろ取り組まれていると思いますので、派遣業者で就労支援をやっている業者が絶対的に悪いという風には言いませんが、ただ派遣業で数字を単純に残すような企業があるとすると、それは完全に失業を再生産するような羽目になるのではないかと思います。そういう意味ではすごく地道に 8 月からやってきて、当然最初は 0%から始まりますので、当初の 9 月 10 月時点での 17,18%ぐらいの就労決定率、数字で言ってもそれくらいの数字から、徐々に数値が伸びているという意味では、すごく伴走支援の意味というか、時間をかけて就労につなげていくということの意味を、この間は感じているところです。実績とか数字とかで表せない価値というのが、実際あると思っていて、そこをどうやって言語化したり数値化したりすればいいのかということを模索しながら、それこそ布川先生などに

も相談させてもらいながら、今取り組んでいるような状態です。

ホームレス実態調査で見えたこと

この就労支援に取り組む中で、浜松市の中区からは、もっと数多く支援をして欲しいということを、この間言っていただいてきました。そうした信頼関係や支援への評価も一定得ることができたということなのかもしれませんが、浜松市から、特命でホームレスの生活実態調査の依頼を受け、生活実態調査アンケートの 50 問近くの質問をする調査をいたしました。そこでは実際にこの就労支援の対象者の方で、ホームレスを経験している方に先導してもらい、一緒に回りました。ホームレスの経験のある人は、だいたいどこに誰がいるかという、他のホームレスのことをよく知っています。1 ヶ月間で 10 件という限定の調査だったのですが、1 月の調査だったので、年末年始をはさんだということもあって、契約の取り交わしの関係もあって、調査開始をできたのが 1/20 からでほとんど時間がなかったのですが、本当にネットワークがしっかりあるというのを、まざまざと見せ付けられました。実際行くと顔見知りの方に挨拶しながらアンケートの依頼をしてくれて、1 日で 8 件終わってしまって、その後、ホームレスの支援をされている団体の所の炊き出しに同行させてもらって、2 件もらって、10 件を 2 日間で終わらせてしまいました。

ホームレスの方に質問していく中で、アパートに戻りたくないという方が大半で、それはなぜかというと、今の生活の方が気楽だし、アパートに入ったら自分は喧嘩をしてしまうし、人間関係が難しいという様なことを言っているんです。人との関係がわずらわしいということを言ってはいても、実際もともとホームレスをしていた我々の支援対象者とのネットワークはいまだにありますし、そこで夕方質問させてもらいに行った所では、3 名で公園でお酒を飲んだりしていたんですけど、そのうちの１名はもうすでにアパートに住んでいる方だったりします。ホームレスであっても同じ境遇の人同士であれば、人間本来のつながりを求めるという心があるということを改めて感じて、これは今支援している支援員もそこを見てさらにその大事さをつかんで、今後の支援を進めることができるという意味で、すごく勉強になったなというふうに思っています。

ネットワークの構築

ネットワークを構築するというところで、やはり私たちだけではやりきれないという部分もありますので、支援団体だったり、ＮＰＯだったり、あとは清掃事業者や障害者施設にスポット就労やボランティアという形でも入らせてもらったりしています。なかなか外に出られない対象者に関しては、うちの自前でやっている介護の現場だったり、清掃の現場、子育て支援の現場があったりするんですけど、そういう現場に直接仕事が出来ない人も、出勤してみるだけとか、見学するだけとか、そういうところからスタートするという方法もあります。そういう徐々に外に出て行って、人と接するという事もして、社会に復帰していくというような流れを作れるというところで、自前の事業所もそんなに数多く静岡の中でありませんので、もっともっと企業開拓を進めていきたいと考えています。

今日も体験という面では、私個人的な趣味でもあるんですけど、もともと大学を卒業し

て、当初７年ほどなんですけど、豆腐屋をやっていました。豆腐作りが得意というか仕事だったので、そういうこともあって、今障害のある子のお母さんたちと子育てのフォーラムで集まったときから接点があって、そのお母さんたちと一緒に、豆腐作りの講座をやったりしています。そこのネットワークから、今焼津に畑を持っている方がいて、その畑を無償で貸してくれるということなので、支援メニューとしてそこの草刈みたいなことから対象者と一緒にやるという、そういう体験の場もつくっていくということになっています。そこでさらに大豆でもつくることができれば、そこから豆腐づくりにつなげられるというところで、いろんなことをネットワークづくりのきっかけにしていきたいと言う風に思います。そこで体験に来る子どもたちと、支援対象者が触れ合えるというのはすごく重要な場面になるかなあと思っていて、はやくそこを形作ってやっていけたらいいなと思っています。

支援メニューの模索

レジュメの１番の一番下の、「支援メニューの模索」という所では、履歴書をまず作成して持ってきもらって、添削をするのですが、写真を持ってきてもらっても、その写真自体、頭にタオルを巻いている写真を持ってきてしまうような方がいたり、やはりそれではなかなか就労に繋がらないという事例がたくさんあります。そこで、紙とプリント代として 100 円はもらうんですけど、フォトサービスという形で写真を撮って、店でやるようなものをパソコンで作っています。

あとはいらなくなったスーツを集めた貸出は、それこそハローワークの方も協力してくれて、貸し出しをやっていると言ったら、支援員はほとんど男性なので、女性物がなくて、そういうスーツのいらないものを頂いたりして、今ストックをしてあり、それを写真撮るだけに使ったり、あとは面接に行く時に使ったりということで対応しています。実際この間、写真を活用したのと、面接の時にスーツを着て行って、製造現場に決まったという方もいて、実際の印象としても、それは仕事の中でスーツを着て通勤するということはないようですけれども、そういうことを入口の段階でしっかりして面接に臨めるというところでは有効な手段かなと思っています。

それから自転車の貸与は、本来はリサイクルするので廃棄の時には出す場所が決まっているということなのですが、それを譲ってくれるルートがありまして、それを自分たちで修理をして貸出しています。やはり行動範囲が狭いと、かなり就労に向かうにあたって場が制限されてしまうので、生活保護の方は車が持てないということもありますので、その対応として自転車を貸して、行動範囲を広げて就労の可能性を高めるというようなことをしています。

それからその行動範囲ということにつながりますけど、原付は福祉事務所によって、就労を目的とすれば持つことが認められますので、原付免許を取得するための講習会を事務所でやっています。

事務所のパソコンを使ってパソコンの講習をしたり、公共施設へ行ってマンツーマンで、

公共施設においてあるパソコンを使ってパソコンの講習をしたりもしています。

それから浜松の方では外国の方が多いので、ブラジル人の支援員を配置していて、外国の方の就労先というのは、一般的な求人で出ている中身との違いもありますし、ポルトガル語で書かれた求人情報ももちろんあって、外国人のネットワークはわれわれだけでは知りえなかったのですが、その支援員のネットワークから、そういった求人をもらうことができています。われわれはそれを今、浜松から中部や東部に送ってもらっていて、西部地区に限らず、いくつかのハローワークの方と情報を共有するということもし始めたところです。

そういうさまざまなネットワークだったり、関係性を作っていく中で、最終的にただ就労するということではなくて、自立という所が求められてきます。自立する上での関係性というところがやはり一番大きいということを支援員誰もが思っていて、その関係性の中で意欲が高まってくるということが見られていますので、今後もそこの所は意識して、そして最終的に誰一人取り残さないという覚悟を持って臨んでいきたいと思います。

2. 今後の課題と展望

支援メニューの多様化

今後の課題や展望というところでは、支援メニューをもっともっと多様化しないといけないと思ってます。就労体験の場というと、先ほどの畑だったり、そういう場を多く持ちたいというのがあります。就労体験の場で、焼津の話もありますが、浜松の方でもっと大きなみかん山を管理して欲しいと言ってくれている方がいます。2 万坪あるみかん山を、建設業をやられている社長さんが持っていて、仕事をリタイアした後に趣味程度でそこをやろうと思ってたということなんですけど、仕事がなかなか暇にならず、どんどんどんどん山が荒れ始めているため、管理をお願いしたいということで、そこでもその場所を就労体験だったり、労働力としても一緒に作って行けたらということで場づくりを進めています。

その社長さんなども、最初はそれこそ「生活保護を受けているなんて…」というようなスタンスではあったんです。福祉事務所のほうから稼働能力があるという前提の方が、対象者として来ているということもあるかもしれないですけど、私たちが出会っている方は、保護期間が長くなり、意欲がなかなか出てこない方も多くいますけれども、本当に仕事がしたくても、なかなか仕事の場が無いという方が大半だというのを感じています。場がないことが意欲を削いでいるいるという面もあると思います。やる気のある方はたくさんいるのに場がないというところを、直接の仕事の場ではなくて、体験みたいな場で、その企業の社長さんと出会うような場面があるということは、すごく重要なことだなと思っています。その社長さんの価値観も変わってくるでしょうし、そういう場をもっともっと作っていって、社会的排除という部分を、何とか私たちが媒介になって越えていけたらというのが強い思いであります。

就労体験、ボランティア体験、それから居場所づくりっていうことで、まだ事務所が気

軽に寄れるっていう形での居場所になっているという程度で、なかなかそういう場を設けられてないということがあるかなと思っています。実際、事務所でも東部、中部、西部で、事務所を置いていますけれども、その中の一つの事務所ではそういういろいろな人が来るので、事務所の外に防犯カメラを付けたいという支援員もいたりするんです。ちょっとそこは意見がまだまだまとまってない部分で、同じ目線で、同じ生活者としてというところのスタンスからちょっと外れてしまうので、そこの意見を一致してやって行きたいと思っています。

それから「セミナー」「技能講習」というところは、これが先ほどお話した埼玉の生活保護受給者の就労支援のところで、県のアドバイスもあり、力を入れて取り組んでいるところです。全部で 20 本くらいの技能講習、フォークリフトの講習だったり、職業マナーの講習だったり、様々行なっていて、当然資格も取れるようなものに関しては、専門の方の力もお借りする訳ですけど、基本的な部分は支援員自身がやっています。支援員自身が講師をやるということで、すごく支援にも活かされているという報告をこの間も受けていて、そこはぜひ学びあいながら、われわれも進めて行きたいと思っています。

求職者支援訓練も、5 月の開校で、ヘルパー2 級の講座と合わせてのものになるんですけども、われわれ介護の現場をヘルパー講座を通して、その受講生たちで立ち上げてきたという歴史を持ってますので、そういところの強みを生かしてやっていきたなって思っています。

就労の場の創出

就労の場作り、自分たちで就労の場をどう創出するかというところを思ってまして、私たちの組織、そのワーカーズコープというのが働く人の協同組合、労働者の協同組合で、地域に必要な仕事を起こしていくということを最大の目標として掲げてやっています。その中で介護の現場を作ってきたという歴史があるわけですけれども、先ほどからお話しているみかん山だったり、焼津の畑だったり、その食や農の取り組みという部分をさまざまな人が働ける場にというふうに思いますし、そういうところを就労の場としても、場作りとしても、より強化していきたいと思っています。

地域で支援するネットワークづくり

さらには先ほどからお話している、地域で支援するネットワークを作って社会的排除に抗するっていうふうに書きました。偏見の目というのは、私たち支援員の中にも当然あって、支援していく中でなかなかやる気を見せない対象者に対して、知らず知らず上から目線になってしまったりということもまだまだ課題として残りながらも、自分たちの意識はずいぶん変わってきていて、さらにそういった意識を地域の人とどうやって共有していくかというところが課題としてあります。

自らの取組みの価値を発信する力

自分たちの取り組み自体を発信するということで、報道のこともそうですし、この間ＮＨＫの取材であったり、静岡新聞の取材がありましたけれども、そういう報道の力も活用

したり、自分たちでホームページをより充実させたりしています。それから全国的に福祉の現場がわれわれの組織で全国的にあるんですけれども、地域の中で地域懇談会というものを、町会長さんや自治会長さんというような方を呼んだり、学校の先生だったり、いろいろな方を呼んで、地域の特性を知りながら地域課題をつかんで、仕事おこしに繋げるということを行なってます。ここ静岡の地でも、そういところを進めて行きたいと考えております。

被災者の生活再建の取組み

今年度、この就労支援の事業を 4 月からまた受託することができたのですが、その中で被災者の生活再建の事業というのが、今回新たに加わっています。実際動き出すのは 6 月くらいになるかなっていうふうに県の方からは伺っているんですけど、被災地から、特に東部の方面になるんですけども、旅館のあるような伊豆下田の方に避難してきている被災者や計画停電の影響などで製造業や旅館業からの失業者が非常に多いということで、そういう方で生活保護を受けている方が、静岡全県で 90 名ほど現時点でいるそうです。そういう方の、就労支援ということに限らない生活再建というところを取り組むということになっております。そこについては、この間就労支援で培ってきた、訪問しながら関係性を作ったり、生活支援っていうところも一体となってやってきたという自負もありますので、そこの関係作りというところを全面に活かしながらやっていきたいというのと、あとはメンタルケアの面も当然必要になってくるとは思いますので、そういったところでは法人内に専門家がいたりもしますので、そういうところのアドバイスももらいながら進めていきたいなというふうに思っています。

3. 全国的な協同労働の取組み

協同労働の価値

全国的に取り組んでいる、私たちの働く人間の協同組合っていう組織なのですけど、協同労働の協同組合と言うんですが、今、協同労働の協同組合の法律、法人格を規定する法律がありません。協同組合の生協さんだったり、農協さんだったりというのは、生協法、農協法というのがありまして、当然皆さんもご存知だと思います。ヨーロッパはそこが進んでいて、イタリアなんかでも社会的協同組合というものがあって、一般的な就労とまた違った社会的な就労の場というところが協同組合形式で作られていて、障害者の自立就労などが主に取り組まれています。この間、イタリアの「人生ここにあり」という映画がありましたけど、その中でも労働者協同組合というところが触れられていました。その法制化に向けて、今国会の方でも 200 名を越えた議員連盟ができてはいるんですが、このことを議論してもらうということがなかなか進んでいかないという現状があります。法制化間近ということが言われながら、十年近くが過ぎているわけですけれども、法制化も目指しながら、自分たちで出資もして経営にもかかわって、仕事もするというような働き方の先駆的な存在として、今後も取り組んでいきたいと思っております。

鹿児島エリア

その協同労働で取り組まれていること、就労支援の基本姿勢にもつながってくることになるのですが、鹿児島のでは、清掃現場や物流現場で若者が多く活躍をしています。全国的に清掃の現場もたくさん持ってはいるんですが、若者が清掃現場で多く活躍している現場は、本当に全国的にも我々の中でも少ないというのが現状です。その中で自分たちで田んぼを借りて、米を作って、今年は販売をしようということになっています。去年は、若者たちで作った米を被災地に送ったり、実際自分たちで地域活性化ということで友達も集めて、合コンに近いかもしれませんが、婚活事業を自分たちで始めたりというような取り組みをしています。若者の想像力だったり、そういう力をまざまざとこの間感じているわけですけれども、そういったところも学びながら進めていきたいと思っています。

愛知焼酎プロジェクト

私たちの静岡の就労支援の事業所も事業本部の単位で言うと、東海の事業本部という位置づけであるんですけども、愛知の知多、犬山等でも、農業に関わる部分なんですが、休耕地を計 37 万坪くらい、この間借りることが出来るという話を自治体と一緒に進めていて、酒造メーカー等とネットワークを持って、全部で 30 団体くらいそこに関わっています。そういうネットワークで障がい者だったり、社会的排除にあっている人たちの働く場として、そこで芋は土を選ばずに作ることができるということですので、それを作って、焼酎やスイーツを造ろうというようなプロジェクトが今スタートしています。このＦＥＣ（food energy care)、今年 2012 年というのが、ちょうど国連の定めた国際協同組合年なんです。それで協同組合、農協さんも生協さんも一緒ですけれど、全労済さんだったり、森林組合とかそういうところの国際協同組合年という年で、そこで日本の代表を務めてくれているのが内橋克人さんですけれども、そこで FEC ということ自給する地域コミュニティを作ろうということを内橋さんが言われていて、そこは協同組合全体でも共有しています。そこで自分たちの基本姿勢ということもあって、この間農業の取り組みなども、人が見向きもしないようなところを活用して、どうやって地域活性化させるかということに取り組んでいるようなところです。そういうところで就労の場ができるということは、就労支援ということに本当に密接に関わって来る部分だと思いますので、そこはより力を入れて行きたいと思っています。

埼玉

埼玉では、技能講習だったり、協力企業のネットワークがすごく密になっていて、それこそある企業の社長さんがすごく協力的で、今でも生活保護受給者の方がその運送会社の倉庫の中で複数仕事をしています。辞めたかけ方もいるということですけど、従業員の方や生活保護を受給していた先輩がフォローして継続できたというエピソードも聞いています。支援対象者だった方たちを、みんなやる気があるというふうに評価もしてくれています。フォークリフトの技能講習のところでは、その社長さんが実習の場を知り合いの企業を紹介してくれて、そういうネットワークができています。

対象者と一緒に仕事おこしをしているというところでは、埼玉の蕨市で移動コンビニみたいなことを始めています。仕事おこしにワーカーズコープとして取り組むにあたって、もともとはリサイクルショップをやろうと話をしていたようなのですが、移動コンビニというニーズが、なかなか買物に行けない高齢者の方、買物弱者の方のサポートということが、地域懇談会を持った中で意見として出て、それに取り組もうということで、今支援対象者とうちの組合員と一緒になって、言うなれば対象者だった人が一緒の組合員となって仕事をしているというような状況になっています。

東北復興本部

東北の先ほどの生活再建の取り組み、被災者支援ということと繋がってくるかと思うんですが、東北に復興本部というのを、われわれの組織として置きました。もともと東北に事業本部はあるんですけれども、そことは別個で既存の事業を東北の事業本部がやっていて、復興本部はそれこそ求職者支援訓練から一緒に仕事を作ろうというカリキュラムを組んで、取り組み始めてます。その中で静岡や埼玉でやられているような就労支援の依頼についても来ているようです。そこについても実際仕事の場はそれこそ全て流されてしまったような状況の中で、どういうふうに取り組めるかというのも、実際相談をしながら埼玉や静岡以上に厳しいと思いますので、そこでどういう取組がなされるかというところも、東北から学べる部分がたくさんあるかと思います。そういうところも活かして、この就労支援というものをより豊かにしていきたいというふうに思っております。